【写経】

秩父三十四観音霊場巡りの巡礼路にある 2 つの寺では、写経体験ができる。十六番礼所の西光寺と三十二番礼所の法性寺である。英語または中国語での説明を希望する場合は、法性寺を訪れると良い。予約は不要だが、参加者 1 人につき 1,000 円の寄付が必要である。

法性寺では、写経用に 3 つの経文を用意している。般若心経、観音経、そして延命十句観音経という 42 文字の観音経の短い形である。十句観音経は初心者に最適で、通常は写経に 30 分から 1 時間を要する。

写経体験者は、写経机と写経に必要な用具が用意された畳の部屋に案内される。選んだ経文の文字の上から半透明の複写用紙を乗せるため、上から下、右から左へと文字をなぞるだけでよい。崇敬の念を込めてゆっくりと慎重に筆を運ぶことが重要であるが、上手に書き写すことよりも、写経を行う者が素直な心を持って取り組んでいることのほうが重要である。書き損じた場合はすべて線を引き、正しい文字を横の余白に書く。

経文の最後の行には、日付、功徳を受ける者の名前および写経者の名前を記入するための空白欄がある。伝統的には、写経が終わればその経文を読み上げる。僧侶がいくつかの音を区切って読み上げ、写経者がその言葉を繰り返す。写経した経文は、持ち帰るか、寺に奉納するかを選ぶことができる。奉納する場合、写経文は他の供物とともに仏壇に置かれ、その後、儀式的に燃やされる。

写経の歴史

写経は、仏教の伝来とともに 6 世紀に日本に入ってきた。奈良時代（710～794 年）には、写経は、この新たに伝わった信仰の主な信徒であった貴族の間で人気になった。印刷機が発明される前の時代、宗教の経典とそれに関連する教義の普及は、書物を手で書き写すという手間のかかる作業によって支えられていた。写経者の技量や選んだ経文の長さに応じて、経文を全て書き写すのに数ヶ月、さらには数年かかることがある。日本で最もよく写経される経文は般若心経であるが、観音経、金剛経、阿弥陀経、法華経も一般的である。経典全集を書き写すという、宮廷が後援していたプロジェクトは、3 年半ごとに行われ、1 年間に同時に約 1 万人の人々がこのプロジェクトに力を注いでいた。経典の手写は、宗教の普及に役立ったのであるが、写経はまた、それを行う人の信心深さを表現する、功徳を積むための行為でもあった。

仏教の教義において、この「功徳」は、単に善行を施したという意味にとどまらない。それは、輪廻転生（サンスクリット語：サムサラ）における人の運命に影響を与える可能性がある。現世で功徳を積むと、来世でより良い世界に生まれることができると信じられている。獣や虫ではなく、人間として生まれることは、悟りを開き、輪廻転生から解放されるためのより良い機会が与えられるということである。写経によって得られた功徳の御利益を他人に働かせることができるため、愛する故人のため写経を依頼するのは一般的な慣行となった。

写経のプロセスは非常に瞑想的である。文面を理解するよりも、誠実さと敬意を持った姿勢に

近づけようとすることのほうが重要である。写経を行う者は、手と衣服が清潔であり、写経のための用具がきちんと並べられ、机が整頓されていることを確認する。